令和８年度病害虫発生予報　第７号（11 月予報）

令和８年 11 月２日付

奈良県病害虫防除所

今月の発生に注意を要する病害虫

作物名	病害虫名	発生時期	発 生 量
イチゴ	コナジラミ類	平年並	やや多い
ネギ	ネギアザミウマ	平年並	多い
野菜・花き共通	ハスモンヨトウ	平年並	やや多い
	シロイチモジヨトウ	平年並	やや多い

〇気象予報（近畿地方の１ヶ月予報：10/24～11/23）

気温：平年より高い確率 70%　降水量：多い確率 50%

日照時間：平年より少ない確率 50%

〇今月の農薬適正使用のポイント

①イチゴ等にミツバチやマルハナバチなど訪花昆虫を使用する場合や、天敵製剤を放飼する場合は、使用する農薬の影響日数をあらかじめ確認し、危害が発生しないようにしましょう。

②ハウス内で農薬散布する場合は、ハウスサイドを開けるなどして通気を確保しましょう。閉め切った状態で湿度が高くなると、薬液の乾きが遅くなり、薬害が発生しやすくなります。

③夏秋栽培が終了して農閑期に入る方は、冬の間に農薬庫内の在庫を確認・整理しましょう。使用期限が過ぎた農薬は、登録制限によってラベル通りに使用しても残留基準を超過する場合がありますので、十分注意してください。

〇今月の病害虫対策のポイント

①冬作物では、秋のうちに苗で持ち込んだ病害虫や飛来する害虫を徹底防除して、冬に残さないようにするのが基本です。結球するアブラナ科では結球するまで、施設栽培ではハウスサイドを閉め切った直後までが勝負所です。農薬への抵抗性発達状況などにも留意しながら、効率的に防除してください。

②イチゴの施設栽培で天敵製剤を利用する場合は、天敵への影響日数を考慮して農薬を選びます。葉かきと防除作業を放飼までに済ませておき、放飼後２週間程度はこれらの作業を控えましょう。今年初めて導入する場合は、最寄りの農林（農業）振興事務所などの指導を受けて下さい。

③夏秋栽培が終了して農閑期に入る方は、改めて今年の防除履歴を振り返り、次年度の改善に繋げましょう。

Ⅰ．普通作物

１．水　稲

（１）縞葉枯病

防除上の注意事項

1) 年内に耕起を行い、ウイルスに感染した稲株を腐熟させます。
2) 水田周辺のイネ科雑草は、媒介虫であるヒメトビウンカの越冬場所となるため、枯れ草も含めて除草を行います。
3) 発生地域では、次年度、ムギ畑やイネ科雑草地周辺での育苗は避け、移植時にはウンカに適用のある箱施用剤を必ず施用します。

（２）スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除上の注意事項

1) スクミリンゴガイは、大半が本田の深さ６cm までの土中に潜って越冬します。寒さに弱いため、発生地では冬の間に耕起して、ロータリーで破砕するとともに貝を地上に出して寒気に当てます。冷え込みがきつくなると予想された前日に実施すると効果的です。
2) 水田の横の水路でも越冬しますので、多発地では冬の間に水路の泥上げを行います。

Ⅱ．果樹・チャ

１．カキ

（１）炭疽病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや少ない

予報の根拠

1) 10 月上中旬に甘柿園地で行った巡回調査では、発病果率は 2.5％と平年に比べてやや低かったです。発生が見られた園地の割合は 58％でした。
2) 9 月以前は発生が少なく推移しましたが、降雨や気温の低下にともなって発生が見られる園地がやや増えてきています。

防除上の注意事項

1) 次作にむけて休眠期から対策を徹底します。
2) せん定時に、越冬病斑（だ円形で、少しくぼんだ黒い病斑のある枝）があれば徹底的に切り取って、園地外に持ち出して処分します。
3) 薬液がかかりやすくなるよう、縮間伐や整枝・せん定をします。
4) 次作では、春期から定期的に薬剤散布をします。また、発病した枝や果実を見つけ次第、切り取って園地外に持ち出します。

（２）フジコナカイガラムシ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや少ない

予報の根拠

1) 10 月上中旬に甘柿園地で行った巡回調査では、被害果率は 2.0％で平年に比べてやや低かったです。

防除上の注意事項

1) 次作にむけて休眠期から対策を徹底します。
2) 越冬場所となる粗皮を削りとり、越冬する数を減らします。
3) 薬液がかかりやすくなるよう、縮間伐や整枝・せん定をします。
4) 次作では、幼虫が発生する４月中旬～下旬および６月上旬～中旬の防除を徹底します。それ以降は薬剤が効きにくい成虫や卵が混在するようになるので、薬剤散布による防除が難しくなります。

２．チ　ャ

（１）チャトゲコナジラミ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 10 月下旬の調査では、発生圃場率は 10.0％、寄生葉率は 10.0％でした。

防除上の注意事項

1) すそ刈りを行うことで、寄生葉の除去を行うとともに、薬剤防除効率の向上を図ることができます。
2) 発生の多い園では、２月末までにマシン油乳剤（商品名：トモノールＳ、ラビサンスプレー）で防除します。10 月末から 11 月上旬までの防除は次年度の密度抑制に効果的です。年内と１～２月に２回散布することでより防除効果が高まりますが、赤焼病が発生しやすくなるので、赤焼病の常発地では年明け後に行います。
3) マシン油を散布する３日から７日前に銅水和剤を事前に散布することで赤焼病の予防を行います。
4) すそ部を中心に葉裏に薬液がかかるよう、ていねいに散布します。

Ⅲ．野菜類・花き類

１．イチゴ

（１）うどんこ病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 10%、発病葉率 0.1%でした。
2) 外張り資材の被覆後には、新葉や花梗を中心に病勢が急速に進展します。

防除上の注意事項

1) 開花期にスクレアフロアブル、パレード 20 フロアブル、パンチョＴＦ顆粒水和剤等の効果の高い薬剤で防除を行います。出蕾後の花梗や果実に発生すると防除が困難になります。
2) 薬剤散布前には必ず下葉かきを行い、動力噴霧機の圧力を下げて、薬液が株全体の葉裏にむらなくかかるよう丁寧に散布します。
3) 薬剤は同一系統の連用を避け、必ず薬剤散布の２～３日後に葉裏を観察し、防除効果を確認します。白い菌そうが薄くでも残っている場合は、薬剤の防除効果が低下している可能性があるので、その薬剤の使用を控えます。

（２）ハダニ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 20%、寄生葉率 3.8%でした。
2) 外張り資材を被覆した後は雨があたらず、気温も上昇するので、ハダニが増加しやすくなります。
3) 11 月の気温は高いと予想されており、増加しやすい条件です。

防除上の注意事項

1) ハダニ類は葉裏に寄生し、発見が難しいので葉かきの際に注意して観察します。
2) 薬剤による防除が困難ですので、天敵製剤を導入します。使用する場合は、あらかじめ天敵に影響の小さい殺ダニ剤を散布してハダニ密度を低下させ、ミヤコカブリダニ製剤とチリカブリダニ製剤を同時放飼します。気温が低下すると天敵の増殖が遅れるので 11 月上旬までに放飼します。また、放飼後２週間程度は薬剤散布と葉かきを控えます。使用できる薬剤に制限がありますので、導入の際は、あらかじめ各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。
3) 薬剤散布で防除する場合は、動力噴霧機の圧力を下げて葉裏にも十分薬液がかかるように噴口を上向きにして、株の周りを回すように散布します。葉かき後の葉数の少ない時期の散布が効果的です。
4) ハダニ類が寄生した葉はハウス外に持ち出して処分します。

（３）アブラムシ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや少ない

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 10%、寄生葉率8.0%でした。

防除上の注意事項

1) ミツバチ放飼後には、殺虫剤を使用しづらくなりますので、開花するまでに防除を徹底します。ミツバチに対する薬剤の影響については、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にお尋ねください。
2) ハダニ対策の天敵製剤を導入している場合はウララＤＦ、エフィコンＳＬなどで防除します。その際、散布薬液が乾くまで、ミツバチをハウス外へ持ち出します。
3) イチゴでの基幹防除薬剤に対する感受性が低下したワタアブラムシを確認していますので、同一系統薬剤の連用を避け、効果が低い時は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。
4) アブラムシ類に対する天敵製剤の導入を検討する場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

（４）コナジラミ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや多い

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 20%、寄生葉率0.4%でした。

2) 従来のオンシツコナジラミだけでなく、タバココナジラミバイオタイプＢの発生も確認しています。

防除上の注意事項

1) 成虫は生長点付近の新葉に集まって産卵します。白い小さな成虫が目立つようであれば、チェス顆粒水和剤で防除します。
2) コナジラミ類は卵から成虫までの発育に１ヶ月以上かかります。産卵された新葉は、次世代成虫が羽化する頃には古葉になっていますので、定期的な古葉のかき取りを行い、ほ場外に持ち出して処分します。
3) これから冬にかけて気温の低下とともに発生は減少しますが、ほ場内に残すと春に急増しますので注意が必要です。特に古葉を残すと多数の成虫が羽化して急増します。

２．キャベツ

（１）菌核病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
2) 気温 15～20℃で連続した降雨があると、発病が助長されます。

防除上の注意事項

1) 発病株に形成された菌核は伝染源となるので、発生初期に除去します。
2) 水田転換による湛水処理は、菌核を不活化させるのに有効です。
3) SDHI 剤や QoI 剤は効果が高く、降雨前に防除を行います。

（２）コナガ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
2) 農業総合研究センター（桜井市池之内）のフェロモントラップへの誘殺数は平年並となっています。

防除上の注意事項

1) 薬剤感受性が低下しやすいため、同一系統薬剤の連用を控えます。
2) 県内で殺虫剤感受性が低下した個体群の発生を確認しているので防除薬剤の選択に注意します。効果が低い時は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。
3) 防除所による感受性検定では、アファーム乳剤、ベネビアＯＤ、グレーシア乳剤、スピノエース顆粒水和剤、エスマルクＤＦの効果が優れていました。ほかのアブラナ科作物と併せて防除を行う場合は、作物ごとの登録の有無と内容を確認してから使用します。

（３）アブラムシ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや少ない

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

1) ウイルス媒介を予防するため、葉裏や芯葉への寄生の有無を注意して観察し、発生初期の防除を徹底します。

３．ホウレンソウ

（１）べと病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

1) 今後、天候不順が続くと、特に発生しやすい条件となりますので、施設内の高湿度を避けるため、換気と排水対策を徹底します。
2) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去します。
3) 前作で発生したほ場では、ユニフォーム粒剤、ランマンフロアブル、レーバスフロアブル等による防除を行います。
4) レース１～10 抵抗性品種でも発病が確認されています。

（２）ホウレンソウケナガコナダニ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや少ない

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では発生を認めていません。
2) 11～12 月は被害が多い時期ですので、注意が必要です。

防除上の注意事項

1) 本葉２葉期頃と、４～６葉期頃にグレーシア乳剤を散布します。
2) 寒熟ホウレンソウ栽培は作期が長いため、必要に応じて追加防除を行います。
3) 被害株や収穫後の残さはハウス内にすき込まず、ほ場外に持ち出して処分します。
4) 稲ワラ、モミガラ、未熟堆肥などの有機物を土壌に投入すると発生を助長します。特にモミガラの使用は、モミガラ堆肥も含め控えます。
5) 冬に休作するハウスでは、栽培終了後早めに被覆ビニルを除去し、できるだけ長期間、降雨にさらすことにより、春作の被害が少なくなる傾向があります。

４．ネ　ギ

（１）べと病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。

防除上の注意事項

1) 春作で発生したほ場では、ジマンダイセン水和剤、リドミルゴールドＭＺやベトファイター顆粒水和剤等で予防散布を行います。

（２）ネギハモグリバエ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では発生ほ場率 80%、被害葉率 9.2%でした。

防除上の注意事項

1) ネギハモグリバエにはバイオタイプＡとＢの 2 つの系統が存在します。バイオタイプＡは 10 月から蛹休眠に入りますので 11 月には発生は終息しますが、バイオタイプＢは 11 月にも被害が発生します。油断せずによく観察して、発生が継続する場合はネギハモグリバエもしくはハモグリバエ類に登録のある殺虫剤で防除します。
2) バイオタイプＡは途切れた断続線状の食痕を残しますが、バイオタイプＢの食痕は不規則な連続線状となり、１カ所から多数の線が伸びて互いに繋がり、面的な白化を起こす場合もあります。
3) 秋にネギハモグリバエが発生していたほ場では、株元の土中で多数の蛹が休眠しています。作付け終了後はバスアミド微粒剤で土壌消毒を行います。

（３）ネギアザミウマ

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：多い

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は 100%、被害葉率は 55.6%でした。

防除上の注意事項

1) 発生が見られた場合はダブルシューターSE、ファインセーブフロアブルなどを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくぴかなどの展着剤を加用します。
2) ネギアザミウマは休眠性がなく、今後も発生は継続します。気温が高い間は増加に注意します。

５．キ　ク

（１）白さび病

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1) 10 月下旬の巡回調査では、発生を認めていません。
2) 気温の低下と多雨により発病が促進する恐れがあります。

防除上の注意事項

1）次年度作に発生を持ち越さないために、親株を防除します。

（２）褐斑病・黒斑病

予報内容　発生時期：平年並　　発生量：平年並

予報の根拠

1）10 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 60%、発病葉率1.2%でした。

防除上の注意事項

1）次年度作に発生を持ち越さないために、親株の防除を実施します。
2）密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
3）発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
4）発生初期にダコニール 1000 等で防除します。

（３）ハダニ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：やや少ない

予報の根拠

1）10 月下旬の巡回調査では発生ほ場率 40%、寄生葉率 1.6%でした。

防除上の注意事項

1）次年度作に発生を持ち越さないために、親株の防除を実施します。
2）ハダニの寄生部位である葉裏に薬液がかかるよう心がけます。
3）殺ダニ剤に対する感受性の低下が進んでいます。同一系統薬剤の連用を避け、効果が低い時は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

（４）アブラムシ類

予報内容　　発生時期：平年並　　発生量：少ない

予報の根拠

1）10 月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 20%、寄生葉率 1.2%でした。

防除上の注意事項

1）ネオニコチノイド系殺虫剤に対する感受性が低下したワタアブラムシを確認しています。同一系統薬剤の連用を避け、効果が低い時は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

６．野菜類・花き類共通

（１）ヨトウガ類

予報内容　発生時期：平年並　発生量：ヨトウガ：並
ハスモンヨトウ：やや多い
シロイチモジヨトウ：やや多い

予報の根拠

1）10 月下旬の巡回調査では、ヨトウガの発生を認めていません。
2）ハスモンヨトウの発生ほ場率は、イチゴ 10%、ホウレンソウ 60%、キャベツ 33%、シロイチモジヨトウの発生ほ場率は、ネギ 40%でした。その他の作物での発生は巡回調査では発生を認めていませんが、巡回調査以外において様々な作物での発生を確認しています。
3）フェロモントラップ誘殺数（桜井市設置）は、ハスモンヨトウとシロイチモジヨトウは平年より多く、ヨトウガは平年並です。

防除上の注意事項

1）発育が進むと薬剤の効果が劣るので、若齢幼虫期での防除が重要です。
2）ヨトウガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウは、それぞれ有効薬剤が異なります。ほ場をよく観察し、発生種に応じた薬剤を選択します。有効薬剤の情報が不明の場合や、防除効果が低かった場合は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。
3）詳細は９月 14 日付発表の病害虫発生予察注意報第２号、10 月９日付発表の病害虫情報第４号もご覧下さい。

※農薬に関する情報は、令和８年 10 月 28 日までの農薬登録情報に基づいて記載しています

お問い合わせは

奈良県農業総合研究センター　環境・病害虫防除科
（奈良県病害虫防除所）
TEL.０７４４－４７－４４８１

その他関連情報は以下をご覧下さい

病害虫防除所ホームページ
https://www.pref.nara.lg.jp/n128/66263.html